

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡

—桐原一丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会

序

2020年に東京オリンピックが開催されることが決まり、その準備が着々と進められているところと聞き及んでおりますが、思い返せば長野市において熱戦が繰り広げられた長野オリンピックから、もうすぐ17年の月日が経とうとしています。1991年に開催都市が長野市に決定してから、高速道路や新幹線の開通、会場周辺の道路整備など、オリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなり、当市をとりまく環境も急激に変化いたしました。しかしながらこうした劇的な変化の片隅で、地中に埋もれている貴重な歴史である埋蔵文化財が、これら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております棚原牧野遺跡は、浅川が形成した大規模扇状地上に立地する浅川扇状地遺跡群を構成する遺跡の一つです。近年、今回の調査地周辺は、都市計画道路や宅地造成に伴う発掘調査が盛んとなっている地域でもあります。このたび、開発事業者による宅地造成工事が行われることになり、保護協議を経て、その一部において記録保存を目的とした発掘調査を行いました。ここに長野市の埋蔵文化財第143集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連続と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解と発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました、開発事業者である株式会社かつらの皆様、実際の作業にあたりご理解・ご協力を賜りました調査地近隣の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2016（平成28）年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守




例 言

- 1 本書は、「桐原一丁目分譲地造成工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社かつら 代表取締役 野村桂子 と、長野市長 加藤久雄 との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査協定書」及び「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。委託事業名は以下のとおりである。

平成26年度：桐原一丁目分譲地造成工事に伴う平成26年度埋蔵文化財発掘調査業務委託
平成27年度：桐原一丁目分譲地造成工事に伴う平成27年度埋蔵文化財発掘調査業務委託
履 行 場 所：長野市桐原一丁目765番地1外
- 3 調査地は、長野県長野市桐原一丁目765番地1外に所在する。調査面積は623㎡である。本地点は字村西に位置し、浅川扇状地遺跡群内の未命名遺跡に属するが、今回および周辺の既往調査の成果から東に隣接する字牧野に遺跡の中心があることが予想されることから、「桐原牧野遺跡」として報告する。
- 4 発掘調査は、平成26年9月2日から平成26年11月27日にかけて実施した。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は平成27年度に行った。
- 5 発掘調査及び本書の作成は日下恵一が担当し、清水竜太がこれを補佐した。本書の執筆は、第Ⅰ章・第Ⅳ章を飯島哲也、第Ⅲ章第1節を清水、第Ⅱ章・第Ⅲ章第2節を日下が分担した。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は、「AK1K」である。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかかなものを中心に報告した。
- 2 図中に示した方位は、地図は真北、遺構実測図等は座標北を表している。なお、磁北は真北より西へ約7°00'の偏差がある。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅱ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
竪穴住居跡…S B、掘立柱建物跡…S T、溝…S D、土坑…S K、小穴…S P
- 5 遺構実測図は、1/20で作成した原図をもとに、竪穴住居跡・掘立柱住居跡・溝1/80、小穴1/40で掲載した。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、土器1/4、石器1/3で掲載した。
- 7 遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 土器実測図において、断面の  は須恵器、 は灰釉陶器を表す。また、内面の  は黒色処理の範囲を表す。

目次

第1章 調査の経過	1	第3節 桐原地区の発掘調査	6
第1節 調査に至る経緯と調査経過	1	第Ⅲ章 調査成果	8
第2節 調査日誌(抄)	3	第1節 調査概要	8
第3節 調査体制	4	第2節 遺構と遺物	13
第Ⅱ章 遺跡の環境	5	第Ⅳ章 まとめ	18
第1節 地理的環境	5		
第2節 歴史的環境	5		

挿図目次

図1 調査地位置図	1	図13 SB3カマド詳細図	14
図2 調査区配置図	2	図14 SB3遺物実測図	14
図3 調査地周辺旧地形図	5	図15 SB4実測図	15
図4 桐原地区の発掘調査	7	図16 ST1実測図	15
図5 調査区層序	8	図17 SD1実測図	16
図6 0次面遺物実測図	9	図18 SD2実測図	16
図7 1次面全体図	10	図19 SD3実測図	16
図8 2次面全体図	11	図20 SP8実測図	17
図9 SB1実測図	13	図21 SP8遺物実測図	17
図10 SB2実測図	13	図22 表採資料遺物実測図	17
図11 SB2遺物実測図	13	図23 噴砂詳細断面図	18
図12 SB3実測図	14		

表目次

表1 遺構一覧表	12	表3 石器観察表	19
表2 土器観察表	19		

写真目次

写真1 第1調査区表土掘削作業(9月2日)	3	写真3 第2調査区遺構掘削作業(11月11日)	3
写真2 第1調査区トレンチ掘削作業(9月11日)	3	写真4 第2調査区遺構測量作業(11月19日)	3

写真図版目次

遺構写真	20	遺物写真	22
------	----	------	----

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と調査経過

調査地は、薬駒奉納の行事で有名な桐原牧神社の南西に位置し、閑静な住宅密集地の中で長らく畑が営まれていた場所である。周囲に住宅が立ち並ぶその一角に、開発事業面積約6,750㎡宅地23区画の造成計画が浮上したのは平成26年3月25日に遡る。開発事業者からの依頼を受けたコンサルティング会社の担当者から長野市教育委員会（以下、市教委）文化財課埋蔵文化財センター（以下、当センター）へ埋蔵文化財の取り扱いに関する照会がなされた。当該地の東側隣接地においては、既に都市計画道路高田若槻線の建設工事に先立つ発掘調査が財団法人長野県埋蔵文化財センターによって実施されており、埋蔵文化財包蔵の可能性は極めて高いものと容易に予想された。事業者から同年5月16日付で文化財保護法（以下、法）第93条第1項による届出が市教委宛に提出され、同月22日付26埋第2-25号で市教育長から法第93条第2項による指示（発掘調査）を通知した。なお、これに先立つ19日には、事業者からの依頼により埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、2～3層の遺物包含層を確認している。

その後、段階的に継続実施した埋蔵文化財保護協議の過程で、事業者の都合により開発工事が4つの工区に分割され、うち1工区と2工区が第1期分の工事として平成26年度に先行実施されることになった。埋蔵文化財の保護に関する協定書については、将来的な第2期工事も含めて開発区域全体6,752.25㎡を保護対象区域とし、開発事業者と市教育長との間で平成26年8月29日付で締結した。発掘調査による記録保存は基本的に永久構築物

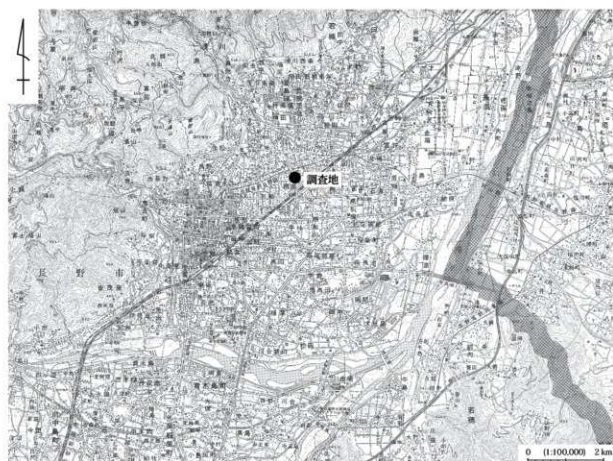


図1 調査地位図

に該当する開発道路部分約1,500㎡とし、保護層が確保される宅地予定地他については、埋蔵文化財への影響が懸念される範囲を工事立会とし、影響がない場合を現状保存の措置としている。また、協定書に添付した発掘調査実施計画書には、第1期工事分（1・2工区）の発掘調査を平成26年度に実施し、その分の整理作業を平成27年度に実施して報告書を刊行し、第2期工事分（3・4工区）は平成28年度以降というスケジュールが計画されている。平成26年度は、開発事業の第1期工事分に該当する範囲の道路予定面積約800㎡について発掘調査を実施することとなり、平成26年9月1日付で開発事業者と長野市長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。

現地における発掘作業は、同年9月2日から着手し、まず1工区に該当する範囲を第1調査区として重機掘削から開始し、10月9日に最終的な全景写真を撮影して調査を一旦休止した。引き続き2工区に該当する範囲を第2調査区として10月21日から再開し、11月27日に機材等をすべて撤収して、実質調査面積623㎡、調査日数87日間の発掘作業をすべて終了した。

12月25日付で平成26年度分の委託契約について委託料の減額に関する変更協議を行い、翌平成27年1月8日付で変更委託契約を締結した。契約条項第8条に基づき、同年3月4日付で事業者宛に実績報告書を提出し、平成26年度分の事業を終了した。協定書に基づき、平成26年度に実施した発掘調査の整理作業については、平成27年4月6日付で委託契約を締結した。発掘調査報告書として本書を刊行したところで、平成27年度分の委託業務を終了する。なお、第2期工事分については平成28年度以降に実施予定であり、現段階においては具体的な日程は未定である。

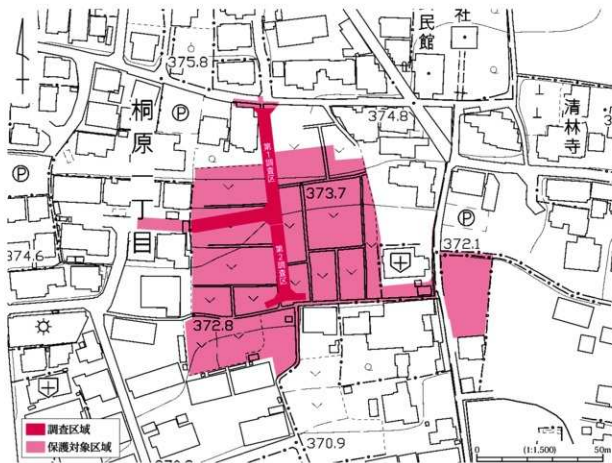


図2 調査区配置図

第2節 調査日誌（抄）

- 9月2日 第1調査区発掘開始。1次面表土掘削（～10日）。
9月8日 遺構検出（～10日）。
9月11日 西端南壁にて古墳時代前期の壺形土器出土。
9月12日 遺構掘削（～19日）。
9月22日 全体清掃・全景写真撮影。遺構測量。
9月24日 結線。
10月7日 重機により掘削。2次面遺構検出。
10月8日 遺構が検出されず、洪水堆積による礫層を確認。
10月9日 全体清掃・全景写真撮影。
調査区壁セクション写真撮影。
10月10日 遺構測量。
10月16日 結線。
10月21日 第2調査区発掘開始。1次面表土掘削・遺構検出。
10月24日 遺構掘削（～31日）。
11月4日 全体清掃。
11月5日 航空写真撮影・遺構測量。
S B 3 トレンチ掘削。
11月8日 結線。
11月9日 重機により掘削・2次面遺構検出。
11月11日 遺構掘削（～17日）。
11月18日 全体清掃・各遺構写真撮影。
11月19日 航空写真撮影・遺構測量。
11月20日 結線。重機により掘削・3次面遺構検出。
遺構掘削（～21日）。
11月21日 噴砂痕トレンチ掘削。
11月25日 全体清掃・各遺構写真撮影。
11月26日 遺構測量。
11月27日 結線。噴砂痕トレンチ掘削、断面写真撮影。
撤収作業。



写真1 第1調査区表土掘削作業（9月2日）



写真2 第1調査区トレンチ掘削作業（9月11日）



写真3 第2調査区遺構掘削作業（11月11日）



写真4 第2調査区遺構測量作業（11月19日）

第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内 征治（平成26年度）、近藤 守（平成27年度）
統括管理者	文化財課	課長	青木 和明
調査責任者	埋蔵文化財センター	所長	小山 敏夫
		（庶務）係長	竹下 今朝光
		職員	大竹 千春
		（調査）係長	飯島 哲也（調査担当者）
		係長	風間 栄一
		主事	小林 和子
		専門員	田中 曉徳（調査員）・日下 恵一（調査員）・清水 竜太・ 遠藤 恵実子・柳生 俊樹・高田 亜紀子・藤井 ちひろ
石材鑑定	信州新町化石博物館	係長	富山 幸司
発掘作業員	青木 典子・荒井 稔・伊藤 咲子・上原 律江・江守 久仁子・岡沢 貴子・岡宮 純子・ 北村 まどか・後藤 大地・堀入 洋子・杉本 千代・諏訪 里子・高波 政二・田村 玲子・ 宮島 熱・森 はる美・横田 与志子		
整理調査員	青木 善子・鳥羽 徳子・武藤 信子		
整理作業員	清水 さゆり・関崎 文子・西尾 千枝・待井 かおる・三好 明子		

なお、発掘調査の実施に伴い必要となる掘削用の重機やコンテナハウス等の機材については、開発事業者から現物提供を受けた。また、遺構測量、基準点測量、および空中写真撮影の業務についても、開発事業者からの技術提供を受けた。土器については、長野県埋蔵文化財センター大久保邦彦氏よりご教示賜った。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

調査地のある桐原は、長野市街地北東部に位置する吉田地区に含まれ、長野市域を南北に貫く千曲川の支流、浅川の扇状地、扇状部に位置する。浅川は古くから「浅河原」と称された所謂水無川であり、通常は水が少ないにも係わらず、洪水を起こしやすい河川であったため水不足と洪水を繰り返してきた。このため用水確保のために古代から中世にかけて浅川や裾花川から引水され、さらに無数に堰を設けていた。浅川は近世には天井川であることが問題となっており、治水のために浅川水源である飯縄山には7つの池が築かれ、また下流にも溜池が作られた。吉田地区にもかつて9ヶ所の溜池が存在したが、現在は辰巳池・桐原弁天池・中越池を残すのみである。

調査地は長野電鉄桐原駅の南約200mに位置し、住宅街の中に僅かにこの畑地である。大正15年に測量された地形図(図3)からも調査地周辺が桑畑や果樹園などに利用されていたことがわかる。また地形図からは、かつての河川流路の痕跡を示す谷筋が100~150mの間隔をもって並列し、それに挟まれた尾根筋が微高地として帯状に形成されていることが読み取れる。周辺の遺跡は、この尾根筋の微高地を中心に居住域が構成されている。調査地は、桐原牧野遺跡の中心部がある尾根筋からはずれ、谷筋に位置しているものと考えられる。

第2節 歴史的環境

律制制のころ信濃国には10郡67郷が置かれており、桐原地区が属する吉田地区は其中で芋井郷に属してい



図3 調査地周辺旧地形図

たといわれている。また、桐原地区は、古代の桐原牧が存在した地と考えられている。「角川日本地名大辞典20長野県」によれば、その根拠として、12世紀末になると隣接する吉田地区に吉田牧ができていたこと、付近に宇木・駒沢集落があり、また桐原地区内に牧野という地名が残っていることが挙げられている。しかし、実際には桐原牧の所在地を現在の長野県松本市入山辺桐原とする説があり、桐原牧の所在については不明な部分が多い。なお、「北山抄」の応和元年（961）11月4日の条に「桐原駒甘疋を召す。後院牧御馬」とあり、桐原牧が後院領として馬20匹を献上している。

中世には、「諏訪御符礼之古書」応仁2年（1468）において桐原が宇岐・小鹿野・吉田・長島の村とともに古井郷に属する村とされている。浅川や裾花川からの取水による開発によって生産力が増し、五つの村に分立するようになった。以降、桐原の地名は水内郡内の村名として用いられてきた。応永11年（1404）12月の市河文書には、幕府の信濃国守護代細川慈忠が、反抗する高梨朝秀を討ち、桐原・若槻・下芋河の要害を攻め落としたことが書かれており、当時の桐原には要害が築かれており、高梨氏の勢力範囲であったと考えられる。桐原要害は、「長野県町村誌」によれば高野氏城館とされている。桐原牧神社の東方に位置していたと考えられており、内郭の堀跡を示す「堀田」の地名と外郭を示す方形の道路がその名残とされている。長野県埋蔵文化財センターによる平成25年度の調査において堀と土橋、掘立柱建物跡などが検出され、中世の居館跡であることは確実であるが、年代や館主は未だ不明であり、現状では伝承に依拠して高野氏が居館の主としている。これ以外に桐原の氏族として、永享12年（1440）鎌倉公方足利持氏の子を奉じた結城氏朝を征討するための結城合戦に参加した桐原氏が「結城陣番帳」に見える。おそらくは桐原周辺に所在した郷村を基盤とした小規模領主とされているが、桐原要害との関係など不明である。また、文明3年（1471）惟宗忠国が桐原を一時的に知行している。

近世期には、吉田地区は、全ての村が松代藩領であり、桐原も水内郡桐原村として松代藩に属している。村の北方を北国街道が通っている。北国街道は慶長16年（1611）ころに整備され、参勤交代、物資の交流、善光寺詣などで吉田は活気付き、沿道には人家が密集し、人々の往来も盛んであったと推定される。現在の県道長野野線（相ノ木通り）がそれであり、三輪地区から桐原地区を抜けて吉田地区に至る約2kmはほぼ一直線の道路となっている。

明治4年（1871）廃藩置県当時の吉田地区は、吉田・押鐘・桐原・中越・太田の五つの村に分かれていた。明治9年に桐原以外の四ヶ村が合併して吉田村となり、桐原村は水内郡退目村との合併によって古野村となった。明治22年の三輪村への編入を経て、大正12年に長野市編入後に大字古野となり、平成10年の住居表示施行によって現行の桐原一・二丁目となった。

第3節 桐原地区の発掘調査

ここでは、これまでに桐原地区で実施された発掘調査について概観していくこととする。番号は「図4 桐原地区の発掘調査」と一致する。

1、返目遺跡（長野市教育委員会2005）

平成16年に宅地造成事業に伴い発掘調査が実施され、溝4条、土坑2基が確認された。このうちSD1は、赤彩された二重口縁壺や球胴を呈する甕が出土しており、古墳時代前期の方形周溝墓の一部である可能性が高い。

2、桐原宮西遺跡（長野市教育委員会2005）

平成15年に宅地造成事業に伴って発掘調査が実施され、古墳時代後期～奈良時代初頭の堅穴住居4軒、平安時代の堅穴住居5軒、掘立柱建物1棟などを検出した。

3、桐原宮北遺跡（長野市教育委員会2012）

平成22年に宅地造成事業に伴って発掘調査が実施された。弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居1軒・方形周溝墓2基など、古墳時代後期の竪穴住居2軒、平安時代の竪穴住居8軒・掘立柱建物1棟など、中世の溝などが検出されている。古墳時代後期の2号住居からは馬歯が出土した。該期の馬飼育の状況を示している点だけでなく、後世の「桐原牧」との関連も注目される。また、平安時代の1号不明遺構からは円面硯・双耳杯・後碗を含む多量の須恵器が出土しており、近隣に官衛的な施設が存在した可能性を示している。なお、2号不明遺構は位置関係から中世居館の桐原要害を囲繞する堀の一部とみられる。

4、浅川扇状地遺跡群桐原地区（長野県埋蔵文化財センター2011～2015）

都市計画道路高田若槻線建設に伴い、平成23年度より長野県埋蔵文化財センターによって調査が行われ、現在も継続中である。弥生時代から平安時代の竪穴住居約200軒を中心に、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の方形周溝墓、古代から中世の土坑墓、中世の堀跡などが検出されている。特徴的な遺構・遺物に、石製模造品を製作した古墳時代中期の竪穴住居、奈良・平安時代の遺構から見つかった筆立て付円面硯、桐原要害に伴う外堀と土橋などがある。

5、桐原要害（高野氏館跡）

分譲地造成工事に伴い平成27年に当センターにより調査が実施された。報告書は未刊行であるが、古墳時代前期から中世にいたる各時期の遺構が確認されている。中世の井戸や溝は桐原要害に関連する遺構とみられる。



図4 桐原地区の発掘調査

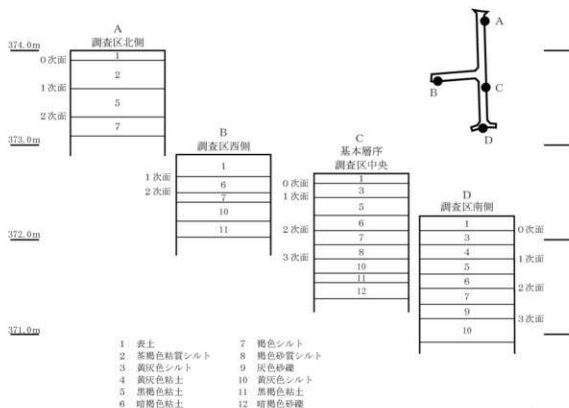
第三章 調査成果

第1節 調査概要

調査地は浅川扇状地の扇状部に位置し、調査着手前は畑地として利用されていた場所である。そのため、北西から南東へ下る緩傾斜地形が比較的遺存し、地表面には南北方向で約1.8m、東西方向で約0.2mの標高差がある。試掘調査では遺物包含層が調査地全域に2層、部分的に3層認められるとともに、表土層直下にも溝状の落ち込みが確認されたことから、調査の実施にあたっては計4面の調査面を設定した。

図5に、発掘調査により確認された調査区北端（A地点）、西端（B地点）、中央（C地点）、南端（D地点）における層序を示した。これによれば土層は概ね地形に沿って堆積しているといえるが、A地点およびB地点では確認できない上位層があり、斜面上方では若干の削平を受けていることが予想される。また、各調査面では旧河道や扇状地特有の洪水砂礫層が現状に検出され、全体を通して統一的に層序を把握するのが難しい状況である。そこで本節では、比較的遺構が密に検出され、安定した土層堆積を示す調査区中央のC地点の層序を基準に、各調査面の概要を見ていくこととする。

0次面は耕作土層である第1層の直下面に設定した。調査の結果、図6に示した土師器碗を含む土師器・須恵器・陶磁器などの遺物が629g出土したものの、明確な遺構は確認されなかった。注意しておきたいのは、後述するように調査地周辺の地表面から第1層に含まれていたと思われる縄文時代から中・近世までの遺物が採取され、そのうち奈良時代から平安時代の須恵器片の占める割合が非常に高かった点である。本調査で確認された古代に属する遺構は小穴1基のみであるが、周辺の既往調査では竪穴住居跡を含む集落域が確認されており、表



(S=1/40)

図5 調査区層序

採遺物を見る限り調査地近隣の極めて浅いレベルに同様の遺構が存在する可能性は高い。0次面がそうした遺構の検出面である可能性も考慮しておく必要があるだろう。

1次面は第5層上面に設定した。ただし、第5層が存在しない調査区西端のB地点では表土直下の第6層において遺構を検出している。遺構の年代は古墳時代前期から古代に相当し、古墳時代前期では竪穴住居跡1軒、古墳時代後期では竪穴住居跡1軒、古代では小穴1基を検出した。古墳時代前期の竪穴住居跡としたS B 2は、遺物出土状況、遺構立地から周溝墓の一部である可能性が高い。このほかに検出された小穴24基・土坑7基・溝跡1条については、出土遺物がなく所属時期は不明である。遺構分布は全体的に疎で、特に砂礫の堆積が多い中央東西道路の中ほどと南端は遺構のない空閑地となっている。この空閑地は2次面で確認した旧河道の範囲とほぼ重なっており、これを境として西側で古墳時代前期の周溝墓と目されるS B 2、東側で古墳時代後期のS B 3を検出し、両地点で営まれた遺構の所属時期や性格が異っている。

2次面は第7層上面に設定し、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒、時期不明の掘立柱建物跡1棟・溝跡2条・土坑3基・小穴30基を検出した。また、中央東西道路に設定した3ヶ所のトレンチから落込みが確認され、湧水状況および約15m南に掘削されている井戸の存在から、調査地を南北に延びる旧河道の存在が予想された。遺構分布は南半部に集中し、洪水砂礫層に広く覆われていた調査区北半部や旧河道が通る中央東西道路では認められない。竪穴住居跡のS B 4で見つかった覆土を貫く噴砂痕は、浅川扇状地では非常に稀な検出事例である。

3次面は第10層の上面に設定した。調査区南半部のみ確認である。検出されたいくつかの小穴は遺構周辺の土層堆積および覆土の状況から2次面で検出できなかった遺構と思われる、検出面からの出土遺物がなかったことも踏まえれば、遺構面として認識するのは難しいと判断された。



図6 0次面遺物実測図

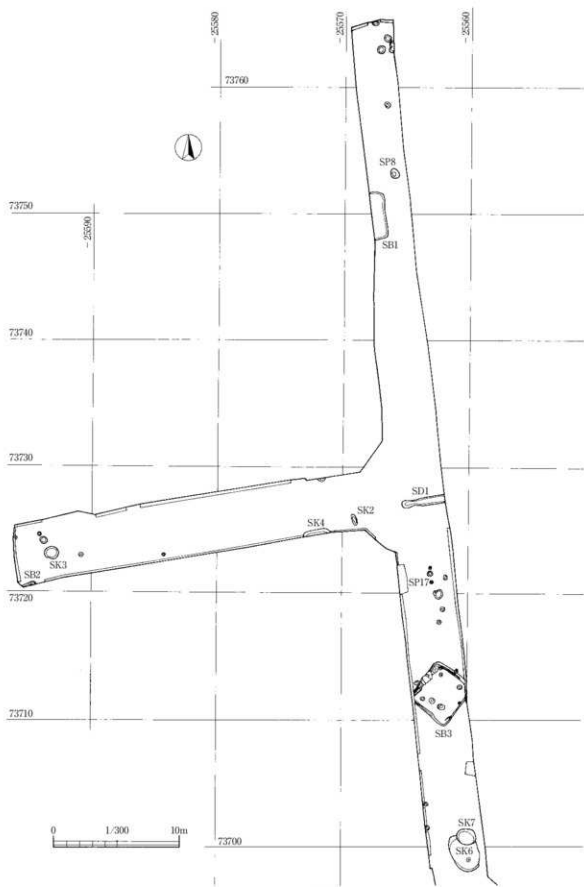


图7 1次面全体图

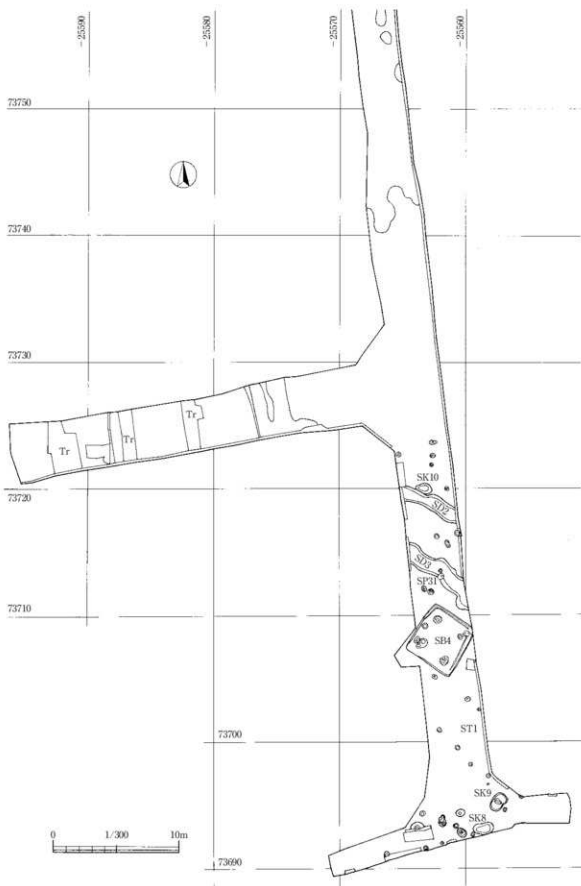


图8 2次面全体图

表1 遺構一覧表

遺構名	調査面	時期	遺 構			土器	
			平面形	規模 (残存値)		重量 (g)	実測
S B 1	1次面		-	長軸 3.80 m 深さ 10 cm	短軸 (1.10 m)	187	0
S B 2	1次面	古墳時代 前期	-	長軸 (1.00 m) 深さ 8 cm	短軸 (0.30 m)	3,175	1
S B 3	1次面	古墳時代 後期	正方形	長軸 3.90 m 深さ 20 cm	短軸 3.65 m	6,523	13
S B 4	2次面	古墳時代 後期	正方形	長軸 4.30 m 深さ 10 cm	短軸 4.20 m	532	0
S T 1	2次面		-			0	0
S D 1	1次面		-	長さ (3.50 m)	幅 40 ~ 64 cm 深さ 12 cm	0	0
S D 2	2次面		-	長さ (4.60 m)	幅 80 ~ 120 cm 深さ 8 cm	0	0
S D 3	2次面		-	長さ (5.20 m)	幅 130 ~ 145 cm 深さ 18 cm	0	0
S K 2	1次面		楕円形	長径 88 cm 深さ 14 cm	短径 34 cm	0	0
S K 3	1次面		円形	径 100 cm	深さ 5 cm	0	0
S K 4	1次面		-	長径 180 cm 深さ 25 cm	短径 38 cm	0	0
S K 6	1次面		長方形	長径 290 cm 深さ 15 cm	短径 220 cm	0	0
S K 7	1次面		長方形	長径 145 cm 深さ 16 cm	短径 120 cm	0	0
S K 8	2次面		楕円形	長径 158 cm 深さ 20 cm	短径 92 cm	0	0
S K 9	2次面		長方形	長径 150 cm 深さ 25 cm	短径 100 cm	0	0
S K 10	2次面		楕円形	長径 125 cm 深さ 12 cm	短径 78 cm	0	0
S P 8	1次面	古代	楕円形	長径 78 cm 深さ 28 cm	短径 68 cm	152	2
S P 17	1次面		円形	径 28 cm	深さ 12 cm	30	0
S P 31	2次面		楕円形	長径 56 cm 深さ 46 cm	短径 44 cm	10	0

第2節 遺構と遺物

SB1

1次面南北道路北側に位置する。西側部分が調査区外にあるため全形を確認できないが、方形の住居と推定される。1辺は3.80mで、検出面からの深さは約6cm、南北方向軸は $N8^{\circ}W$ を指す。床面は平坦で、硬化面は認められず、支柱穴・ピットも確認できない。

遺物は少量で、土師器が187g出土した。土器は図示できるものはなく、遺構の時期を特定することは困難である。

SB2

1次面中央東西道路南端に位置する。北東隅の一部を確認したのみで平面形は不明である。検出面からの深さは4~9cmを測るが、調査区土層断面では約28cm上位まで壁面が立ち上がっていることが確認できる。1基の小穴が確認されたが、支柱穴かは不明である。

遺物は図示をした土師器壺(1)のみである。ある程度形を残したまま横倒しの状態で出土した。底部は平底で若干突出気味であり、外面は口縁から胴下部までハケ調整を施している。その特徴から古墳時代前期のものと考えられる。

SB2は旧河道の西側の微高地に位置している。底面には硬化面や焼土・炭化物など住居跡と確認できるものはない。南東近くには同時期の墓塚が確認されており、周溝墓の可能性も考えられる。

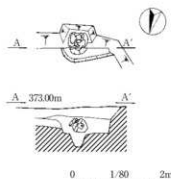


図10 SB2実測図

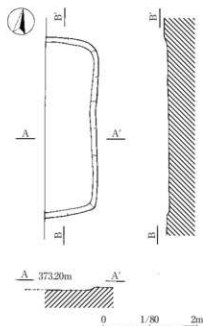


図9 SB1実測図

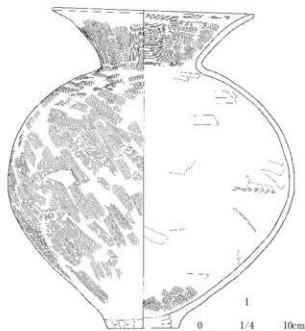


図11 SB2遺物実測図

SB3

1次面南北道路南側に位置する。西隅と東隅が調査区外となっているが、長軸3.90m・短軸3.65mの隅丸方形を呈する住居である。検出面からの深さは約20cmで、主軸方向は $N50^{\circ}W$ を指す。床面は平坦であり、硬化面は認められない。ピットは7基確認し、そのうち支柱穴はP1~P4の4基で、方形配列である。南東壁とカマド付近を除き幅20cmの壁周溝が巡る。北西壁および北東壁の一部が壁周溝より20cmほど外側にあり、床面が拡張さ

れた痕跡と思われる。

カマドは北西壁中央に造られている。両袖は遺存しているが、煙道・天井石・支脚等は確認できない。袖は橙色・暗褐色粘土で構築され、構築材の一部として左袖先端部に土師器の甕が逆さまの状態でごえられている。内部には明瞭な被熱痕や焼土等は確認できず、長期的に使用された状況は認められない。詳細図(図13)に示したカマド内から出土した2

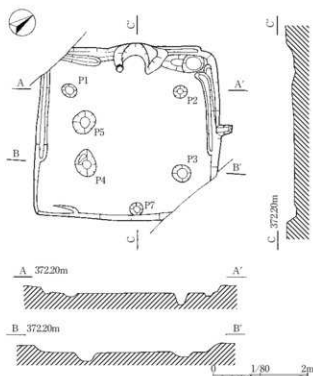


図12 SB3実測図

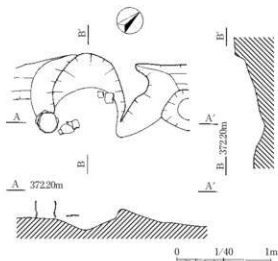


図13 SB3カマド詳細図

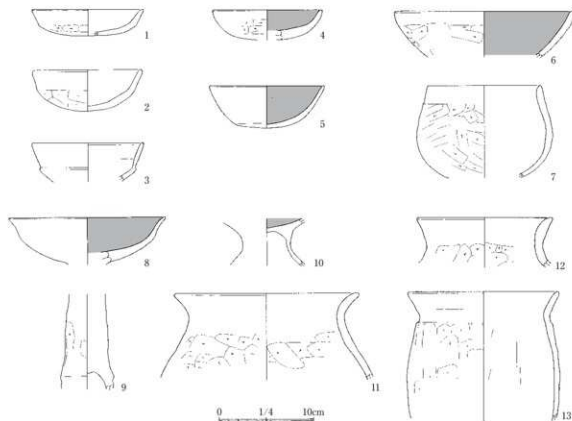


図14 SB3遺物実測図

点の土器はいずれも甕であるが、床面から浮いた状態で出土しており、このカマドで使用されたものであるかどうかは不明である。

遺物は土師器を中心に6.523g出土した。このうち土師器の杯（1～5）・鉢（6・7）・高杯（8～10）・甕（11）・甕（12・13）の13点を図示した。1～3は須恵器の杯蓋を模倣し、杯として使用したものである。11は口縁部のみの遺存である。胴部・把手の形状は不明であるが、外面のケズリ調整などから甕の可能性が高い。13は胴部下半が欠損しているが、それ以外は良好な状態である。カマドの袖部先端に逆さまの状態で見つかったため、構築材として使用されていたと考えられる。

遺物から古墳時代後期の遺構であると推測される。

SB 4

2次面南北道路南側に位置し、北東隅のごく一部のみの調査区外となっている。平面形は長軸4.30m・短軸4.20mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN57°Wを指す。検出面からの深さは10cmである。床面は平坦で、硬化面は認められない。ピットは大小あわせて11基確認し、そのうちP1～P4の4基は主柱穴と考えられ、方形配列となっている。南東壁・北東壁と北西壁の一部に壁周溝がみられる。図15の網掛け部分は地震による噴砂を確認した範囲である。P1・P7の覆土にも噴砂が確認でき、SB4廃絶後に噴砂が発生したことがわかる。

カマドは破却されており、構築材である黄褐色粘土が床面に散在していることが確認された。カマドの位置についてはP5で炭化物がまとまって見つかったことから、北西壁中央付近にあったと考えられる。

遺物は少量で土師器が532g出土した。図示できる遺物はないが、古墳時代後期のものと考えられる土師器長胴甕の破片を確認しており、同時期の所産と判断される。

ST 1

2次面南北道路南側、SB4の南に位置する。4基の柱穴を確認したが、東部は調

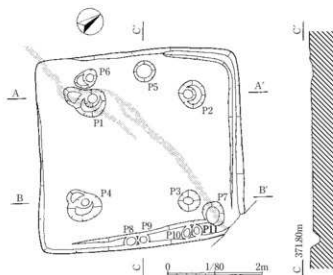


図15 SB4実測図

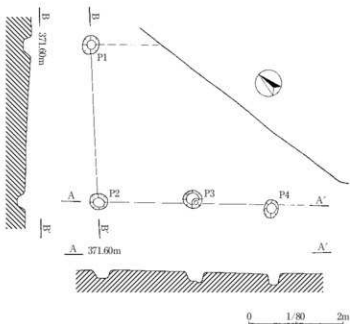


図16 ST1実測図

査区外となっている。主軸はN48° Wを指す。柱穴は径約40cm・深さ約18cmであり、そのうちP5には浅い柱痕と思われる落ち込みがみられる。

遺物は確認できず、遺構の時期を特定することは困難である。

SD1

1次面南北道路中央に位置する。西から東に直線的に伸び、調査区外に続く。確認した範囲では、長さ3.50m・幅0.40～0.60m・深さ12cmを測る。主軸はS86° Wを指す。断面形は皿状である。

遺物は確認できず、遺構の時期を特定することは困難である。

SD2

2次面SB4・SD3の北に位置する。主軸はN65° Wを指す。SK10に北側のごく一部を切られ、東側・西側がそれぞれ調査区外に伸びている。確認した範囲では長さ4.60m・幅0.80～1.20m・深さ8cmを測る。断面形は皿状である。床面レベルに多少の上下はあるが、全体としては傾きはみられない。

遺物は確認できず、遺構の時期を推定することは困難である。

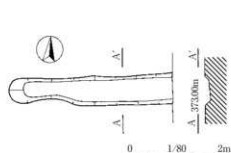


図17 SD1実測図

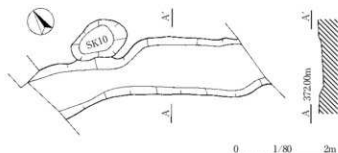


図18 SD2実測図

SD3

2次面SB4とSD2の間に位置する。主軸はN54° Wを指す。南側中央でSP31に切られ、東側・西側がそれぞれ調査区外に伸びている。確認できる範囲では長さ5.20m・幅1.30～1.45m・深さ18cmを測る。断面形は皿状である。中央底部に小穴が1基あるが、SD3との関係は不明である。

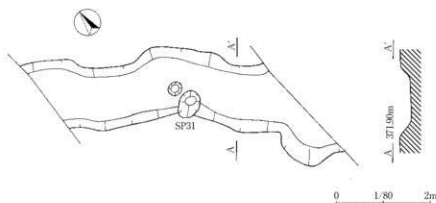


図19 SD3実測図

遺物は確認できず、遺構の時期を推定することは困難である。

SP8

1次面南北道路北側、SB1の北東に位置する。楕円形を呈し、長径78cm・短径68cm・深さ28cmを測る。

出土遺物は須恵器152gがあり、そのうち須恵器の杯(1)・甕(2)の2点を図示する。1は底面に回転糸切り痕が残る。

遺物から奈良時代末から平安時代の遺構であると考えられる。

表採資料

開発事業地のうち、調査区外の表土からは多くの遺物を採取することができた。採取された遺物は、縄文土器・弥生土器から中世・近世の陶磁器まで12,718gを計り、古代の須恵器がその主体を占める。そのうち図示したものは、須恵器蓋(1)・杯(2・3)・瓶(4)・灰釉陶器の椀(5)・打製石斧(6)・凹石(7)の7点である。1は外面に回転ケズリが施されている。2は高台付杯で高台は外面接地である。3は底面に回転糸切り痕が残る。6は硬砂岩製で、欠損はなく完形品である。全面に剥離が及んでいる。明確な摩擦痕・使用痕はみられない。

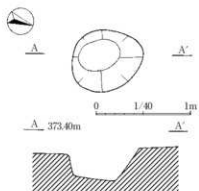


図20 SP8実測図



図21 SP8遺物実測図

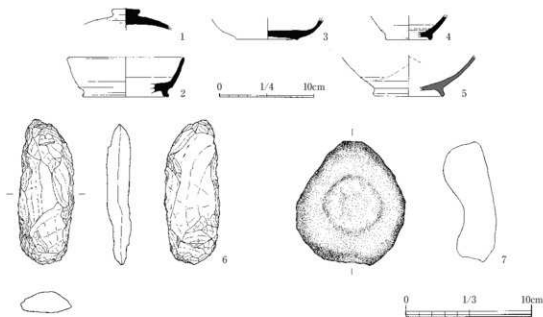


図22 表採資料遺物実測図

第IV章 まとめ

近年、都市計画道路高田若槻線建設事業が本格的に動き出してから、桐原地区における各種開発行為が活性化し、それに伴って発掘調査を実施する機会が増加している。都市計画道路本体に係わる発掘調査は財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文）が担当しているが、当センターにおいても平成22年度に桐原宮北遺跡、平成27年度に桐原要害（高野氏館跡）の発掘調査を実施しており、桐原地区における遺跡の様相が浮かび上がっておりつつある。それらの調査成果を踏まえると、今回の調査では検出遺構の少なさが特筆される。もちろん調査面積が開発道路部分のみという制約があるものの、堅穴住居跡のみならず溝跡や土坑・小穴といった人為的な痕跡そのものが少なかったのである。その要因としては、第1調査区における旧河道の痕跡や調査区全体に堆積する洪水砂礫層などの存在により、自然地形に起因する可能性が考えられる。県埋文の調査結果からも、集落遺跡としての核は古字「牧野」地籍廻りにあることが推測され、当調査区がある「村西」地籍はまさにムラの西、縁辺部に該当するものであろう。

本書においてSB2として報告した遺構は、古墳が周溝墓の一部である可能性が指摘できるものである。遺構そのものは土坑状の落ち込みの一部しか検出できておらず、また畑地耕作土である表土直下から掘り込まれているため旧地表面が大きく削平された残存遺構とみられ、現状としてはあくまで推測の域を出ない。しかし、完形の壘が埋納されたかのような出土状況や、県埋文の調査や宮北遺跡で周溝墓等の墓域が検出されていることを勘案すれば、当該地に存在してもならぬ違和感はない。

また、2次面SB4の床面及び覆土を貫いていた噴砂（噴礫）は、評価が難しい事例となった。噴砂の状況を探るため調査区壁にトレンチを設定したところ、噴砂の噴出元は第11・12層と確認することができたが、噴砂が止まった、ないしは削平された層位が、現場では第5層と第6層の間と観察されたからである。と、すれば理論上、2次面のSB4（古墳時代後期？）を貫き、1次面のSB3（古墳時代後期）が掘り込まれている地山層である第5層で止まっているため、噴砂の発生時期は古墳時代後期の極めて限定された範囲となってしまう。しかし今回の調査では、第5層における貫入痕跡は土質からも判別が難しかったこと、そもそも各遺構検出面の認定において曖昧さを排除できなかったこと、噴砂の地上噴出面を抑えたわけではないこと、噴砂そのものが第5層を貫かなかった可能性も考えられること、等の理由により、噴砂の発生時期の特定は保留せざるを得ない状況である。少なくとも地震発生年代の上限を示したに過ぎないことだけは確かであり、今後の調査において噴砂に留意する必要性を挙げておくにとどめることとする。

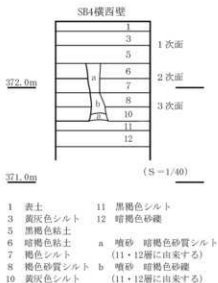


図23 噴砂詳細断面図

参考文献

- 長野市教育委員会 2005 『浅川扇状地遺跡群 桐原宮西遺跡 権現堂遺跡 (2) 吉田古屋敷遺跡 (2) 高日遺跡』 長野市の埋蔵文化財第108集
 長野市教育委員会 2012 『浅川扇状地遺跡群 桐原宮北遺跡』 長野市の埋蔵文化財第130集
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 5 一長野市内その2ー 浅川扇状地遺跡群 三才遺跡』
 (財)長野県埋蔵文化財センター 2011-2014 『長野県埋蔵文化財センター年報』 28-31
 (財)長野県埋蔵文化財センター 2011-2015 『浅川扇状地遺跡群 現地説明会資料』

表2 土器観察表

No	種別	器種	遺存度	層位	色調	調整	文様等
O次面							
1	土師	高台杯	底部1/5	検出面	浅黄橙	底部：ロクロナデ 内面：ミガキ	内面：黒色処理
SB2							
1	土師	壺	口縁～底部 2/3	覆土	にぶい橙	外面：ハケ→ミガキ 底部：ケズリ 内面：口縁～底部→ハケ・板ナデ	外面：黒斑
SB3							
1	土師	杯	口縁～底部 1/5	覆土	にぶい黄橙	外面：口縁部→ヨコナデ・底部：ケズリ 内面：ミガキ	
2	土師	杯	口縁部1/4	覆土	黒褐	外面：口縁部→ヨコナデ・ケズリ 内面：口縁部→ヨコナデ・ミガキ	
3	土師	杯	口縁～底部 2/3	床面	にぶい橙	外面：口縁部→ヨコナデ・底部：ケズリ 内面：ナデ	
4	土師	杯	口縁～底部 1/5	覆土	にぶい黄橙	外面：口縁部→ヨコナデ・ケズリ 内面：ミガキ	内面：黒色処理
5	土師	杯	口縁～底部 2/3	床面	にぶい黄橙	外面：口縁部→ヨコナデ・ケズリ→粗いミガキ 内面：ミガキ	外面：黒斑 内面：黒色処理
6	土師	鉢	口縁部1/5	床面	にぶい黄橙	外面：ナデ・ケズリ 内面：口縁部→ヨコナデ・ミガキ	内面：黒色処理
7	土師	鉢	口縁～胴部 1/3	床面	にぶい黄橙	外面：口縁部→ヨコナデ・ケズリ	外面：黒斑
8	土師	高杯	杯部1/4	覆土	にぶい橙 にぶい黄橙	外面：ケズリ→粗いミガキ 内面：ミガキ	内面：黒色処理
9	土師	高杯	脚部1/2	覆土	にぶい黄橙	外面：ケズリ・指オサエ 内面：粘土かきだし	
10	土師	高杯	底部～脚部 1/2	覆土	灰黄褐	外面：ケズリ→粗いミガキ 内面：ケズリ・粘土かきだし	内面：黒色処理
11	土師	瓶	口縁部1/5	床面	にぶい黄橙	外面：口縁部→ヨコナデ・ケズリ 内面：口縁部→ヨコナデ ケズリ→ミガキ・板状工具ナデ	
12	土師	甕	口縁部1/3	覆土	にぶい黄橙	外面：ナデ・ケズリ 内面：ナデ・ケズリ	
13	土師	甕	口縁～胴上部 1/1	床面	にぶい黄褐	外面：口縁部→ヨコナデ・ケズリ 内面：口縁部→ヨコナデ・板状工具ナデ	
SP8							
1	須恵	杯	底部1/2	覆土	灰黄	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
2	須恵	甕	胴部～底部 1/10	覆土	灰	外面：ナデ 底部：静止ケズリ 内面：ロクロナデ	
表採資料							
1	須恵	蓋	つまみ1/1	表採	灰	外面：回転ケズリ 内面：ロクロナデ つまみ：ナデ	
2	須恵	杯	口縁～底部 1/5	表採	灰	ロクロナデ 底部：ロクロナデ	
3	須恵	杯	底部1/1	表採	灰	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
4	須恵	瓶	底部1/3	表採	灰	ロクロナデ 底部：ナデ	
5	灰釉	碗	底部1/3	表採	灰白	ロクロナデ 底部：ロクロナデ	外面：灰釉 内面：灰釉

表3 石器観察表

No	種別	石材	長さ・幅・厚さ (cm)			重量 (g)	残存率	備考
			長さ	幅	厚さ			
表採資料								
6	打製石斧	硬砂岩	11.5	4.2	1.8	130.52	完形	
7	凹石	安山岩	9.5	8.5	3.6	388.43	完形	4.5 × 4.5 × 1.6 (凹部)



調査地遠景（南西より）



第2調査区1次面



第2調査区2次面



SB2完掘(北より)



SB2遺物出土状況(北より)



SB3完掘(南東より)



SB3カマド遺物出土状況(南東より)



SB4完掘(南東より)



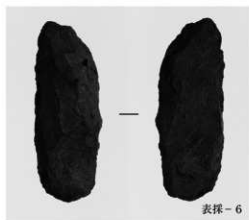
SD2完掘(東より)



SD3完掘(東より)



噴砂痕確認トレンチ(南東より)



報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん きりはらまきのいせき							
書名	浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡							
副書名	桐原一丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第143集							
編集者名	日下恵一・飯島哲也・清水竜太							
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小高田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106							
発行年月日	2016年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
桐原牧野遺跡	長野県長野市 桐原一丁目 765番地1外	20201	A-501	36° 39° 50°	138° 12° 50°	20140902 ～ 20141127	623㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桐原牧野遺跡	集落跡	古墳時代～平安時代	住居跡 4軒 掘立柱建物跡 1棟 土坑 10基 溝 3条 小穴 71基	土師器・須恵器				
要旨	桐原牧野遺跡は、長野市街地の北西部を占める浅川扇状地の扇中部に位置する。調査では2～3面の調査面を設定し、1次面では古墳時代前期・古墳時代後期の竪穴住居跡など、2次面では古墳時代後期の竪穴住居跡などを検出した。S B 4では遺構を貫く噴砂が確認された。							

長野市の埋蔵文化財第 143 集

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡

平成 28 年 3 月 23 日 印刷

平成 28 年 3 月 25 日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課埋蔵文化財センター
印刷 大日本法令印刷株式会社